

千田遺跡発掘調査概要

1990年

小杉町教育委員会

序

富山県のほぼ中央部に位置する小杉町は、県下でも埋蔵文化財が最も集中する地域として知られています。これは、過去から現在まで人々が生活地域の要所としていたことの明かしと考えることもできます。そして現在も将来に向けた様々な開発事業が計画立案され実行に移されています。

本書に収録した千田遺跡は、今まで調査例の多かった丘陵部から平野部に移る台地に位置しています。この調査では、弥生時代後期を中心とした遺構や遺物が多く発見され、この付近に大規模な集落が形成されていたことを窺い知ることのできる貴重な資料となりました。

本書が、今後の調査研究を進めるうえでの参考となり、地域の歴史の理解の一助になれば幸いです。

最後に調査にあたり、ご援助ならびにご協力いただきました地元の方々及び県教育委員会・県埋蔵文化財センターをはじめ関係者の方々に深く感謝いたします。

平成元年3月31日

小杉町教育委員会

教育長 川腰 豊一

例　　言

1. 本書は、富山県射水郡小杉町青井谷字千田に所在する千田遺跡の調査概要である。
2. 調査は、小杉町立金山小学校のプール新設事業の実施に先立ち、小杉町教育委員会が行った。
また、調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を得た。
3. 調査事務局は、小杉町教育委員会におき、社会教育課主事金山秀彰が事務を担当し、社会教育課課長竹林真昭が総括した。
4. 調査期間中、金山小学校及び金山保育所から休憩施設の提供を受けた。
5. 調査担当者は、次のとおりである。
富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 池野 正男・宮田 進
小杉町教育委員会 主事 原田 義範
6. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから助言、指導を得た。
また、調査から報告書作成に至るまで次の方々から指導・協力をいただいた。記して謝意を表したい。(敬称略)
安念幹倫・上野 章・久々忠義・肥田啓彦・千秋謙治・納谷守幸・山内賢一
7. 文章の編集・執筆は、池野正男・宮田進・原田義範が行った。なお文責は、文末に記した。
8. 実測図中の北は磁北である。

目　　次

挿図目次

I 位置と周辺の遺跡	1	図 1 位置と周辺の遺跡	1
II 調査に至る経緯	3	図 2 地形と発掘区	2
III 調査の概要	3	図 3 検出遺構	4
1. 立地と層序	3	図 4 上器集中出土地点	5
2. 遺構	3	図 5 出土遺物	7
3. 遺物	5	図 6 出土遺物	8
4. まとめ	6		

I 位置と周辺の遺跡

千田遺跡は、小杉町を南北に流れる下条川の沖積台地状面に位置する。標高は、約11mである。丘陵から開けた幅約60mの谷間にあり、平野部から約100m川上に向かった狭い平坦地に展開している。この遺跡は、縄文時代から中世までの各時代の遺物が散発的に出土しているが、遺構と遺物からその中心は、弥生時代後期と中世と考えられる。

周辺の弥生時代から古墳時代にかけての調査されている遺跡は、平野部の集落跡として針原東遺跡・白石遺跡・三谷遺跡などがあげられる。また、丘陵上では、中山中遺跡・中山南遺跡・上野遺跡などが知られている。南太閤山I遺跡・中山中遺跡・圓山遺跡は、前述の遺跡周辺の墳墓としてその関連が平野部の集落跡とともに興味のもたれるところである。また、その他の同時代の遺跡は、遺物採集などにより十数箇所確認されているが、いずれも本格的な調査が行われていないためその実態は不明である。

(原田)



図1 位置と周辺の遺跡(縮尺 1/50,000) 1. 千田遺跡 2. 針原東遺跡 3. 白石遺跡 4. 三谷遺跡 5. 中山中遺跡
6. 中山南遺跡 7. 上野遺跡 8. 南太閤山I遺跡 9. 圓山遺跡



図2 地形と発掘区(縮尺約 1/2100)

II 調査に至る経緯

昭和62年9月、小杉町青井谷地内、小杉町立金山小学校プール移転新設工事計画が具体化された。計画地が埋蔵文化財包蔵地に含まれることから、教育委員会内で協議の結果、遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、昭和63年3月29日、計画地（約1,300m²）を対象に行った。発掘面積は、約150m²である。この調査では明確な遺構は検出できなかつたが、弥生時代後期の土器が多く出土している。

この試掘調査結果をもとに、小杉町教育委員会と富山県教育委員会で遺跡の取り扱いについて協議調整が行われ、計画地内の南側部分を中心に記録保存調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和63年4月18日から同年5月21日までの延26日間にわたって実施した。発掘面積は、約950m²である。
(原田)

III 調査の概要

1 立地と層序（図2）

遺跡は下条川によって開拓された青井谷の狭い冲積面に立地する。標高11～12mの東に緩傾斜する台地縁辺部に位置し、東隣に下条川が蛇行して流れる。

基本的な層序は1層表土・耕作土（厚さ約20cm）、2層灰白色粘質床土（厚さ約10cm）、3層暗茶褐色土（厚さ約30cm）で遺物包含層である。北側では3層は薄く、淡青灰色粘質土に変わり、遺物をわずかに含む。本層中からの湧水が激しく、調査区周囲及び中央部に排水溝を設けて調査を実施した。また、無数の赤サビ亀裂面が認められ、土層觀察壁面の崩落も激しかった。4層青灰色粘質土で遺構検出面・地山面にあたる。

2 遺構（図3）

遺構は弥生時代後期のピット群、溝、そして中世の井戸である。ピット群は調査区の南側半分に集中して検出された。ピットは不規則に散在し、住居も確認出来なかったことから、調査地は西に広がる遺跡の縁辺部にあたると推定される。ピットの数は約100個で大小さまざまであるが、直径約20～40cm、深さ約20～40cm程度の規模のピットが最も多い。覆土は明黒褐色土で遺物が出士したピットが多い。溝は2条で短く、浅い。

地山上は青灰色粘質土で、ピット群周辺の暗茶褐色遺物包含層から多量の土器の出土をみたが遺存状態は良くない。遺構検出面までの深さは、表土から約40～60cmである。

中世の遺構は井戸1ヶ所のみである。

ピット43は調査区南側中央のX 8 Y 9に位置する。直径約50～100cmの比較的大型のピット3個が重複し、深さは約5～42cmを測る。覆土からは弥生土器の破片が少量出土した。

ピット87は調査区南西端に位置する不整構円の大型ピットである。西壁は調査区外に広がる。底面はほぼ平坦で、深さは約30cmを測る。覆土中には炭化物が混じり、弥生土器の破片がわずか

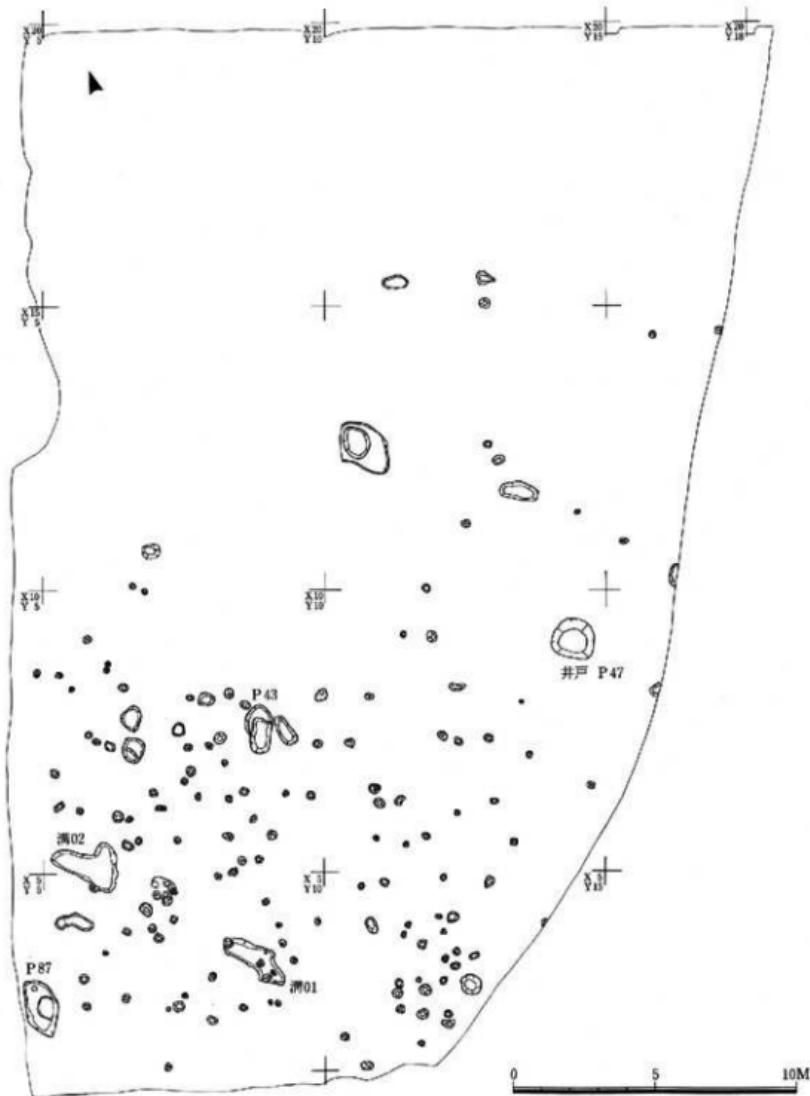


図3 検出構造(縮尺 1/200)

に出土した。

溝01は調査区南側中央のX 4 Y 9に位置する短い溝である。幅約70cm、長さ約2.6m、深さ約25cmをそれぞれ測り、底面、壁面にピットが重複する。

ピット47は調査区中央東側のX 9 Y 15に位置する素掘の中世の井戸である。平面形態は長径約1.6m、短径約1.4mの不整円形を呈し、深さ約1.6mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土上層は明黒褐色土で底部外面糸切りの中世土師器皿の破片が、また、中層から底面にかけての覆土からは砥石、曲物底板、箸などの木製品、貝殻、木の葉などの自然遺物が出土した。また、調査時に井戸底面からの湧水がみられた。
(池野)

3 遺物(図4~6)

遺物は遺構に伴うものがほとんどなく、包含層からの出土が大部分である。特に、X 6~12区Y 12~14区に集中している。土器は器壁の風化が激しく、器面の調整痕が分からぬものが目立つ。復原途中なので、ここでは、代表的なものを取り上げてみる。

遺物には、弥生時代末の土器・石器、飛鳥時代の須恵器、古代の須恵器、中世の土師器・珠洲・木製品などがある。弥生時代のものが大部分である。なお、縄文時代の石斧が1点出土している。

(1) 弥生時代の遺物(図5・6)

土器には、壺・甕・鉢・高杯・器台・蓋などがある。遺構からの出土はわずかである。

壺(1・2) A(1・2) 複合口縁のもので、口縁端部が少し開きぎみになる。端部の幅が短いものもある。

甕(3~13) A(3~9) 複合口縁で、口縁端部が少し開く。調整は内面ケズリ・外ハケである。口縁端部をクシ状工具で凹線に引くもの(A₁、3)とそうでないもの(A₂、4~9)がある。なお、6は、口縁端部をクシ状工具でナデていて、少し凹線状になっている。B(10~11)

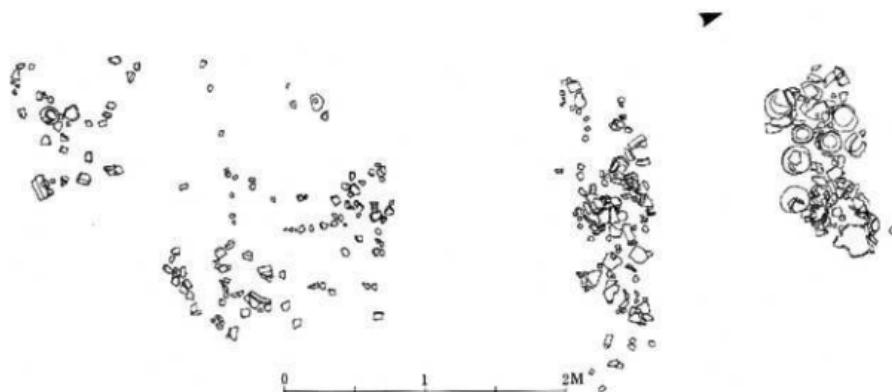


図4 土器集中出土地点[X 6~12, Y 12~14区](縮尺 1/40)

口縁端部に面をとる、「く」の状口縁の壺である。11は端部を少しつまみ上げる。C (12) 口縁端部が折れ曲がって立ち上がる。D (13・18) 複合口縁の小型の壺で、A₂ タイプの広口壺と考える。

鉢 (14~17・19~25) A (15~17) 複合口縁の鉢で、内外面に明確な段を持つ。16・17の口縁部は立ちぎみである。15・17は内外面に赤彩されている。B (14) 口縁部が欠けているが、有孔鉢である。C (19~22) 平底のコップ状のものを一括した。口縁端部が真っすぐなもの (22)、屈曲するもの (19・21)、椀状の体部に端部が屈曲するもの (20) がある。D (23~25) 鉢形に高台の付いたものを一括した。口縁部が外反するもの (25)、椀形のもの (23) がある。

高杯 (26~28) 低い脚部に対して広い杯部が付く。杯部は強く屈曲して、外方に大きく開く。28は脚部が絞まり、端部が開く。

器台 (29) 29は脚部である。その他、脚部に穴のあるものもある。

蓋 (30~32) 大小の蓋がある。30は内面に集散状紋がある。

石器 (33) 33は砂岩製の砥石である。その他、未完成の碧玉製管玉などがある。

(2) 飛鳥時代の遺物 (図 6)

須恵器 (34) 口径12cmの杯身で、端部に受け部が付く。7世紀前半である。

(3) 古代の遺物 (図 6)

須恵器 (35) 高台径10cmの杯身で、高台が少し外に付く。奈良時代のものであろう。

(4) 中世の遺物 (図 6)

中世の遺物には、珠洲・土師器・木製品・磁石などがある。井戸以外の遺構からほとんど出土していない。

珠洲 (36・37) 36は口径34.2cmの壺鉢で、口縁端部に面をとり、曲線的なオロシメを入れる。37は口径36cmで、口縁端部を平坦にし、粗いオロシメを入れる。

土師器 (38~40) 口径7.2~17.2cm、器高1.2~1.5cmの皿で、口縁端部が小さく立ち上がる。口縁部外面に一段のヨコナデを施す。39はナデが強いため、段が付く。38は口縁端部が面取りのため、三角形になっている。

木製品 (41~45) 41は曲物の底板で、42~45は箸である。箸は長さ12~23cmで、断面が偏平な四角形である。

遺物は弥生土器が大部分である。複合口縁の壺A、内面ケズリ・外面ハケ調整が多い壺、幅広の口縁帶の鉢A、口縁部が大きく外反する高杯などの弥生土器の特徴は、小杉町中山南遺跡 [橋本1971]、小矢部市平桜東遺跡第1号住居跡 [伊藤1980] などに似る。石川県の北加賀の編年 [谷内尾1983] によれば、弥生時代末に位置づけられる月影II式を中心とした時期と考える。

中世の遺物はわずかである。土師器皿の形態は、上市町神田遺跡・立山町若宮遺跡のそれ [宮田1984] に似て、13世紀前半と見える。また、珠洲は、吉岡編年 [1976] のII期にあたり、12世紀前半と考える。

(宮田)

4 まとめ

調査面積が少なく、めぼしい遺構も検出されなかつたが各時代の遺物が散発的に出土した。青

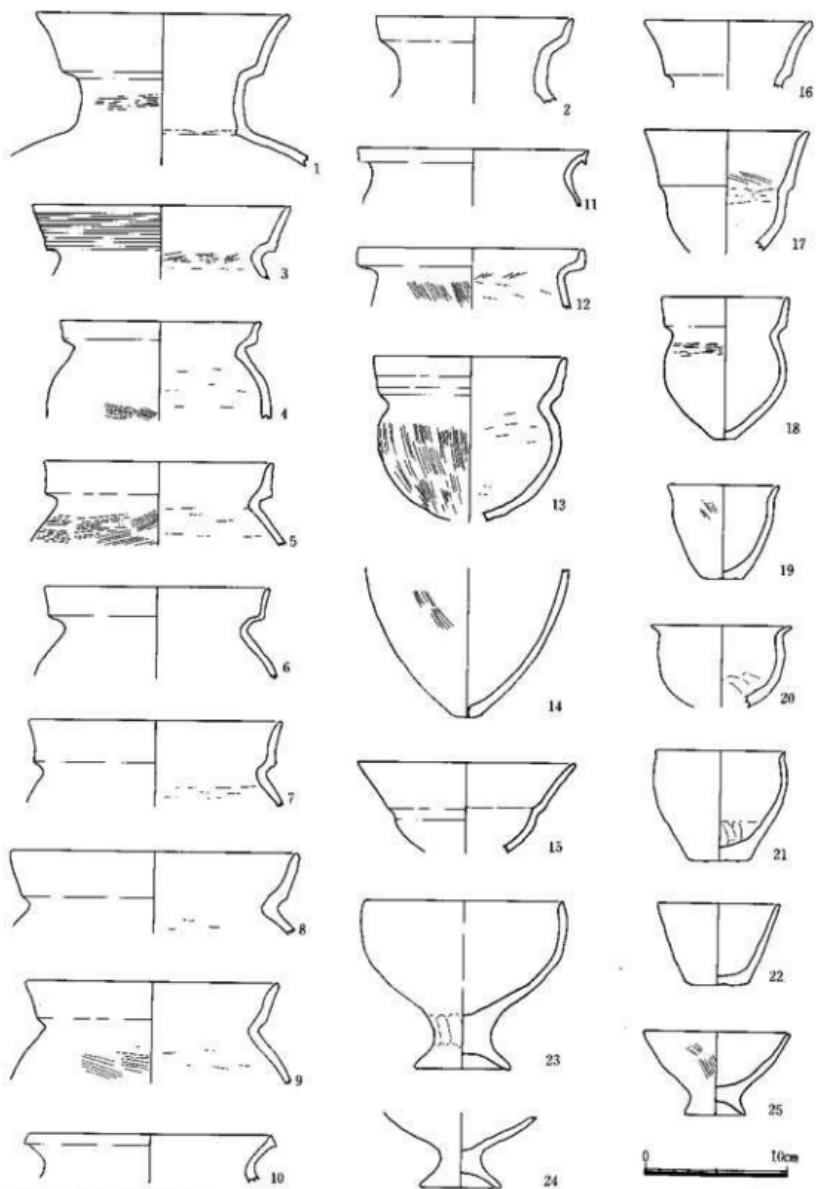


図5 出土遺物(縮尺 1/4)

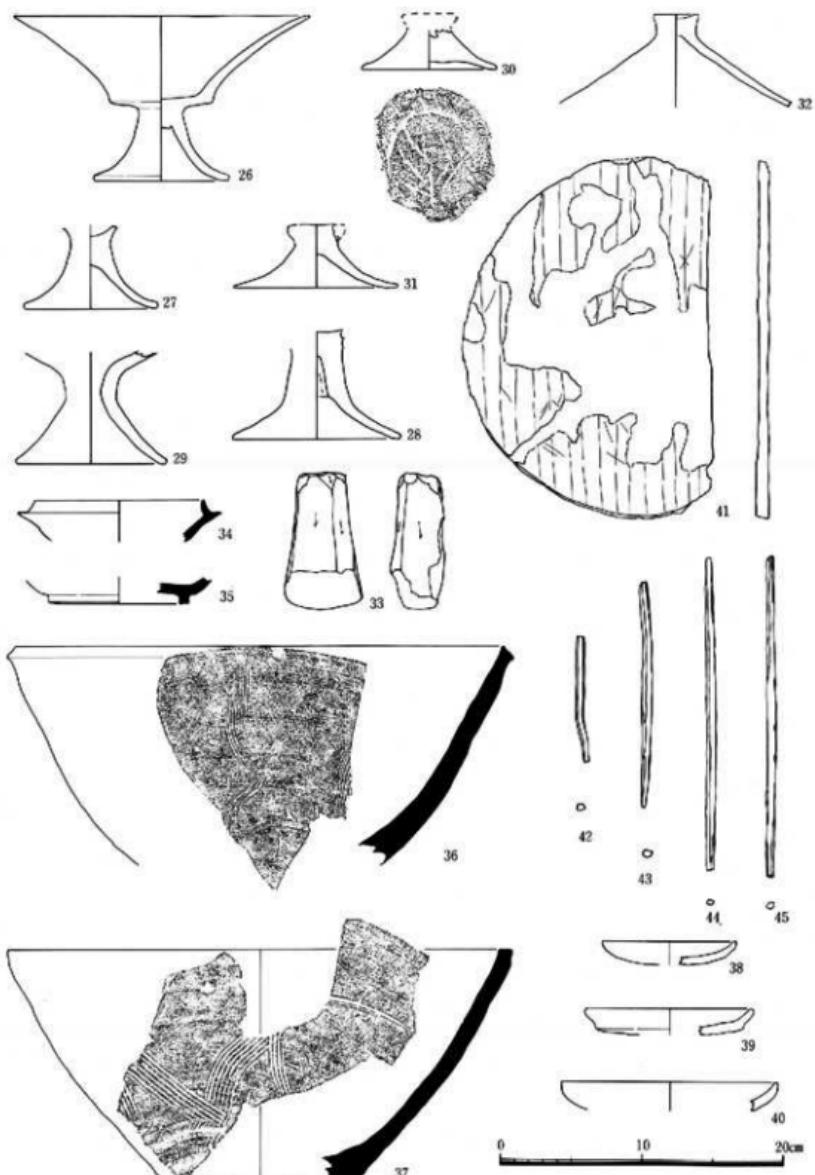


図6 出土遺物(縮尺 1/4)

井谷周辺での調査は丘陵部で多く実施され、下条川沖積面での調査は皆無に等しい状況であり、今後に多くの問題を示唆する遺跡であると考える。以下、列記してまとめとしたい。

縄文時代の遺物は磨製石斧1点である。周辺の縄文時代の遺跡は北方約900mの丘陵斜面から沖積面に変わる位置に早期末から前期前葉の南太閤山I遺跡〔山本 1986〕がある。また、北方約400mに上野遺跡、北西の流岡No.7遺跡など遺跡の大部分は丘陵上に立地する。射水丘陵では単独あるいは少量の遺物が出土する遺跡が多いことが指摘〔山本 1990〕されており、当遺跡もこれに当たる。ただし、沖積面での出土であり今後はこちらにも目を向ける必要があろう。

弥生時代後期の遺構はピット群、溝、遺物は多量の土器、玉未成品、剝片などが出土した。遺跡は西側に広がり、土器の出土量などから集落跡であることは間違いない。周辺の遺跡には墳墓群が検出された南太閤山I遺跡〔宮田 1983、久々 1984〕、集落跡の上野遺跡〔橋本 1974〕などが丘陵上に立地している。当遺跡の発見は、南太閤山I遺跡の墳墓群の被葬者は上野遺跡の住民の可能性も推定されてきたが、墳墓近くの沖積面に遺跡が存在する可能性も出てきた。

古代の土器は7世紀初頭の杯H、8世紀代の杯Bの各1点である。7世紀初頭、8世紀前半代は北西側丘陵地帯で大規模な須恵器生産が行なわれており、ほぼその時期の遺物と推定される。

8世紀前半代のT人集落及びそれぞれの時期の製品集積地を含む中核遺跡は発見されておらず、沖積面に存在する可能性がある。上記、南太閤山I遺跡からは5世紀末・6世紀後半・7世紀前半の須恵器、8~10世紀の須恵器、土師器が出上し、さらに人面墨書き土器、越州青磁の注口される遺物がある〔池野 1983、岸本・山本 1985〕。

中世の遺構は井戸が1ヵ所のみで、遺物は珠洲、中世土師器、木製品などが少量出土し、弥生時代後期と同様に周辺に集落が想定される。周辺の遺跡には、上野遺跡から方形に溝が巡る墓地2基が検出されている他は北西側丘陵部から断片的に遺物が出土している程度で遺跡は少ない。

(池野)

引用文献

- 池野正男 1983 「南太閤山I遺跡 A地区 (1) 宋良・平安時代の遺物」『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』富山県教育委員会
伊藤隆二 1980 「IV上器」『富山県小矢部市平桜東遺跡II』小矢部市教育委員会
岸本雅敏・山木正敏 1985 「南太閤山I遺跡 Ⅲ遺物 2 古墳時代 (2) 須恵器・3 奈良時代 (1) 土器・(2) 人面墨書き土器・4 平安時代」『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要 (3)』富山県教育委員会
久々忠義 1984 「1 南太閤山I遺跡 (3) 遺構」『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要 (2)』富山県教育委員会
橋本 正 1971 「古式上師器について」『小杉町中山南遺跡調査報告書』富山県教育委員会
橋本 正 1974 「小杉町上野遺跡一記録写真編」『富山県教育委員会
宮田進一 1983 「5 南太閤山I遺跡 B地区 (2) 弥生時代末から古墳時代初めの遺構と遺物」『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』富山県教育委員会

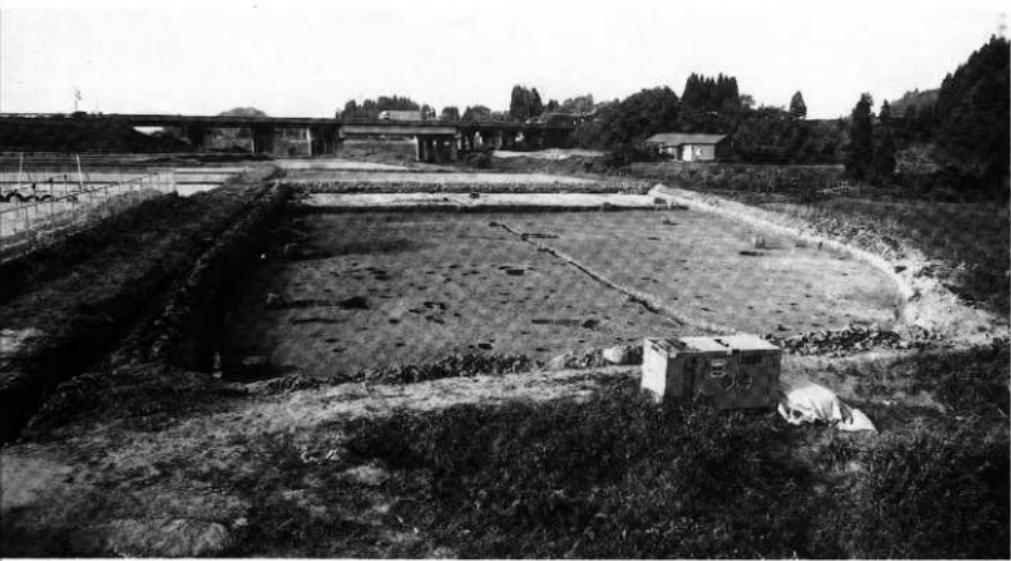
- 宮田進一 1984 「中世の遺跡の性格」『北陸自動車道道路調査報告—上市町木製品・総括編…』上市町教育委員会
- 谷内尾吉司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 山木正敏 1986 「南太閤山Ⅰ遺跡 III遺物」「七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4)」富山県教育委員会
- 山本正敏 1990 射水丘陵地域研究会 繩文部会発表要旨
- 吉岡康暢 1976 「珠洲古窯跡」『珠洲市史 第1巻 珠洲市役所





図版2 上 発掘区近景（北から）

下 発掘区近景（西から）



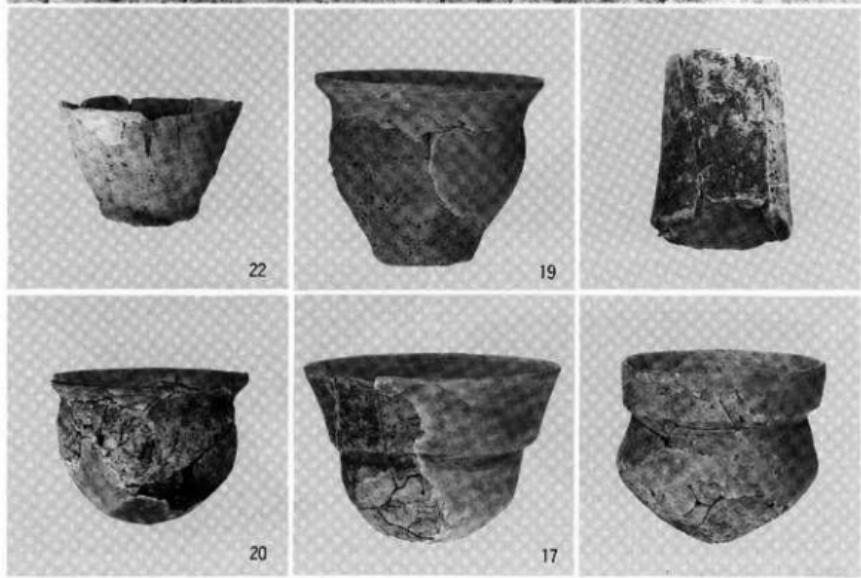
図版3 上 発掘区遠景（南から）

下 井戸（南から）



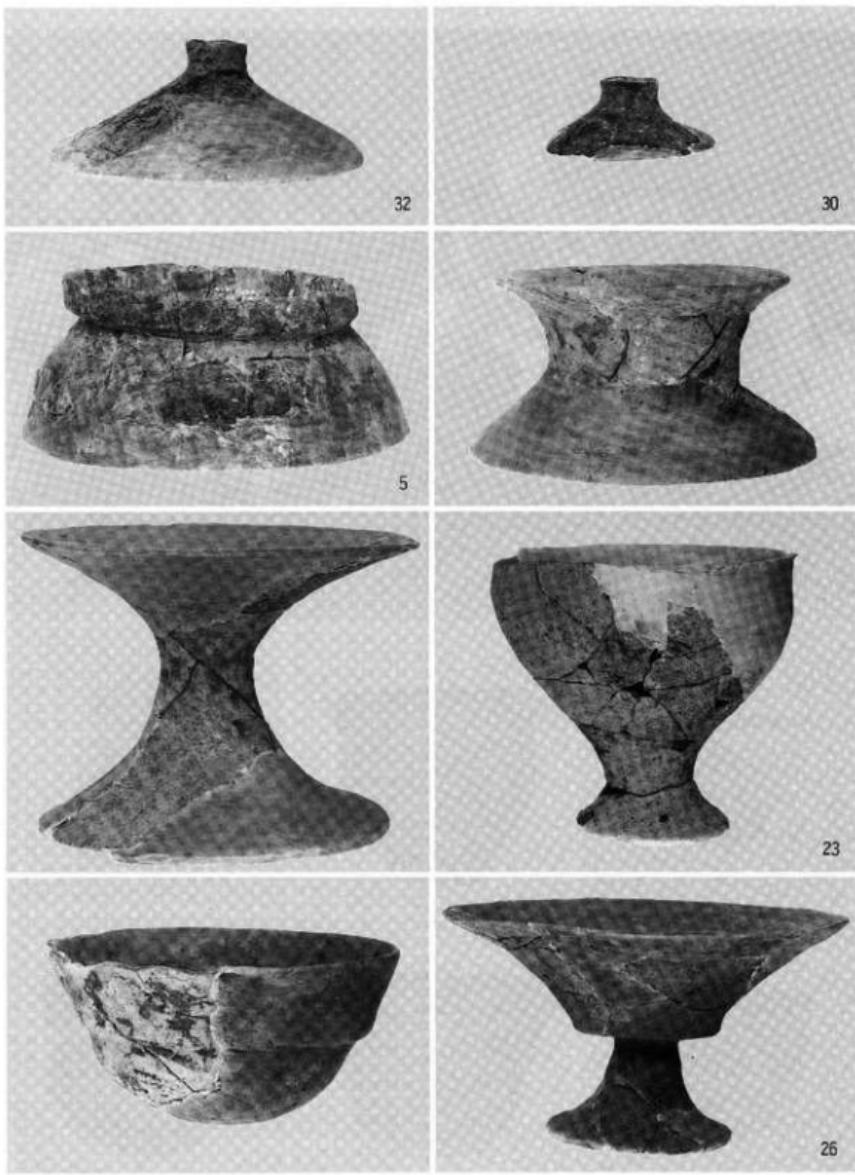
図版4 上 ピット群 (南から)

下 土器出土状況



圖版 5 上 遺物出土狀況

下 出土遺物(1/3)



図版 6 出土遺物 (1 / 3)

平成元年3月31日 発行

千田遺跡発掘調査概要

編集 小杉町教育委員会
発行 〒939-03 富山県射水郡小杉町戸破1,511
印刷 リチューエツ

